

日本語におけるジェンダー表現の一考察 —「女性」「男性」と形容詞のコロケーションを中心に—

馬 雯 雯

要 旨

本研究は新聞記事に用いられている「女性」「男性」という語と形容詞のコロケーションから日本語におけるジェンダー表現を考察するものである。分析に際し、「女性」「男性」と共起する形容詞の全体像を把握するために、テキスト型データを統計的に分析するためのソフトウェア KH Coder で共起ネットワーク図を出力し、分析を試みた。そして、「女性」「男性」の直前に位置する形容詞の考察にあたって、「女性」「男性」と共起関係を有し、直接女性や男性の性質や様子を形容する語をピックアップした。そのうち、「若い」と「女性」「男性」の強い共起関係は偶然なものではなく、「若い女性」「若い男性」は二つの定着度の高いカテゴリーとして認識され、用いられていることが確認された。さらに、カテゴリーとしての「若い女性」「若い男性」はそれぞれ異なった動詞、名詞と共起していることを明らかにした。

キーワード：女性、男性、形容詞、コロケーション、KH Coder

1. はじめに

本研究は計量テキスト分析の手法を用い、日本語の名詞「女性」「男性」⁽¹⁾と形容詞のコロケーションから日本語において女性・男性はどのように表現されるかを明らかにするものである。国立国語研究所（1972）に記述されたように、形容詞にはものや人の性質や状態、動きの様子を表すものがある。このような機能を有する形容詞を分析対象とすることはジェンダー表現研究に不可欠だと考えられる。また、計量的に「女性」「男性」と共起する語を明らかにすることを通し、より一層ジェンダー表現の特徴を浮き彫りにすることができると考えられる。そこで、本研究は「女性」「男性」と形容詞のコロケーションに着目し、「女性」「男性」はどのような形容詞と共起し、ジェンダーを表現するのかを考察する。

2. 本研究の立場

2.1 ジェンダー表現研究

中村（1995：7）によると、ジェンダー表現研究はある言語においてジェンダーがどのように表されているのかを研究する分野である。日本語のジェンダー表現研究には、辞書や新聞に使われる語彙・表現に見られる女性差別を考察したものが多い。例えば、ことばと女を考える会（1985）は、国語辞典を取り上げ、見出し語や語釈、用例に頻出する女性差別を考察している。また、遠藤（1997）は一年分の新聞記事における人物紹介欄と雑誌広告の欄を対象として、女性を表す語彙・表現を考察し、男性を表す語彙・表現との相違とそこに潜む女性に対する不公平や偏見を指摘した。冠として職業名などの前につけられ、その職業に従事している人が女性であることを表す「女性〇〇」についても盛んに検討されてきた（寿岳1979、田中1984、中村1995・2007）。さらに、中村（1995）は、女と男を表す表現の非対称性を総合的に分析し、それを「人間＝男観」と「女＝性観」という概念で説明している。「人間＝男観」は、「僕」「少年」「兄弟」「彼ら」などの男を指す語が女も含んで総称的に使用される例に代表されるような男を人間の基準とする考え方で、「女＝性観」は、女は基準から逸脱した存在として「女という性」によって規定されるとする考え方である。

これらの先行研究の特徴として、質的な分析に重きを置いて性差別的なジェンダー表現を考察している点があげられる。計量的なジェンダー表現研究はこれまであまり行われていない。そこで、本研究では計量テキスト分析の手法で新聞記事を調査データとして、ジェンダー表現の特徴を探ってみることにする。

2.2 コロケーション

本研究では「女性」「男性」とそのコロケーションの視点から日本語におけるジェンダー表現を考察する。コロケーションの定義は立場により異なっており、堀（2009：7）はコロケーションを「語と語の間における、語彙、意味、文法等に関する習慣的な共起関係を言う」と定義するが、Sinclair,

Jones & Daley (2004 : 10) はコロケーションには“significant collocation”（有意なコロケーション）と“casual collocation”（偶然的なコロケーション）があると指摘している⁽²⁾。ここでは、便宜的に前者の捉え方で「コロケーション」という語を用いる。

田野村（2009 : 22）は「コロケーションの研究は何かへの利用、応用が達成されて初めて価値をもつもの」であると述べるが、現在、コロケーション情報は言語教育研究、語彙研究、文法研究、辞書作成などにおいて盛んに利用されている。本研究では女性・男性に関するジェンダー表現の特徴を明らかにするために「女性」「男性」と形容詞のコロケーションの分析を行うが、それは言語と社会にかかわる領域の研究にもコロケーションに関する情報は重要な役割を果たせるはずだと考えるからである。

3. 研究方法

本研究はKH Coder⁽³⁾を用い、計量テキスト分析の手法でジェンダー表現を考察する。樋口（2014 : 15）によると、計量テキスト分析は計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析（content analysis）を行う方法である。また、川端（2003 : 41）は、計量分析を行うことによって、単なる自由回答やテキストデータを読んでいるだけでは気づかない、あるいは気づきにくいデータの「潜在的論理」を発見できる可能性があると指摘している。本研究では、テキスト型データにおいて、名詞「女性」「男性」と形容詞のコロケーションにどのような潜在的特徴があるのかを計量テキスト分析の手法で考察したい。具体的には次のような方法で行う。まず、調査資料としては、『朝日新聞』の記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』の2014年から2017年までの各年の1、2、6、7、11、12月の新聞記事を用いる。そして、「女性」「男性」という語が含まれる記事を、段落を単位として抽出し⁽⁴⁾、その抽出されたテキスト型データをKH Coderで処理した後、KH Coderに搭載されている「関連語検索」⁽⁵⁾と「KWIC コンコーダンス」⁽⁶⁾を利用し、「女性」「男性」についての共起ネットワークとコロケーションを出力する。

本研究においては、量的な方法と質的な方法を合わせ、分析と考察を行う。まず、「女性」「男性」に対する形容詞の共起ネットワーク図を出力して、データの全体像を把握する。次に、「女性」「男性」の直前にあり、最も強い共起関係を有している形容詞の「若い」と「女性」「男性」を中心に質的な分析を行う。

4. 調査結果と考察

抽出された記事は131,144件である。「女性」を含む記事は11,013件であり、「男性」を含む記事は7,325件である。そのうち、「女性」を含む段落数は20,561、「男性」を含む段落数は12,905であった。また、「女性」は26,011回、「男性」は15,837回出現した。ここでは、「女性」「男性」と形容詞のコロケーションについての分析と考察を行う。

4.1 「女性」「男性」と形容詞のコロケーション

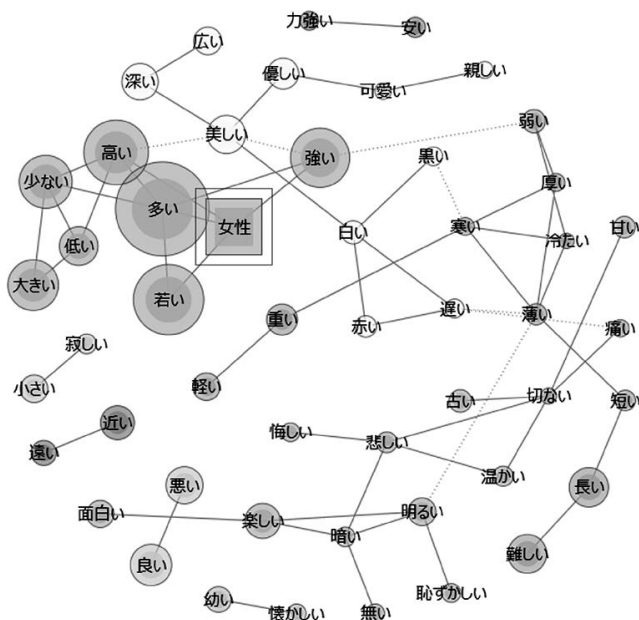


図1 「女性」と関連が強い語の共起ネットワーク

樋口（2014：157）によると、共起ネットワークは出現パターンの似通った語、すなわち共起の程度が強い語を線で結んだネットワークである⁽⁷⁾。出現数の多い語ほど大きい円で描画される。「女性」と形容詞の共起ネットワークは、上の図1のような結果となった。検索条件としての「女性」は2重の正方形で囲んである。このネットワークは「女性」と関連の強い形容詞、すなわち「女性」を含む記事に特徴的にあらわれる形容詞を洗い出した結果である。上述したように、出現数の多い語ほど大きい円で描画されるため、「多い」「若い」「高い」「強い」が「女性」を含む記事に出現頻度が高い形容詞であるといえる。そして、共起ネットワーク図からわかるように、「多い」「若い」「高い」「強い」は検索条件の「女性」と線で結ばれているので、「女性」と強い共起関係を有している。また、「可愛い」「優しい」「美しい」の性格や容姿を表す形容詞が「女性」を含む記事に特徴的にあらわれ、相互に強い共起関係を有している。

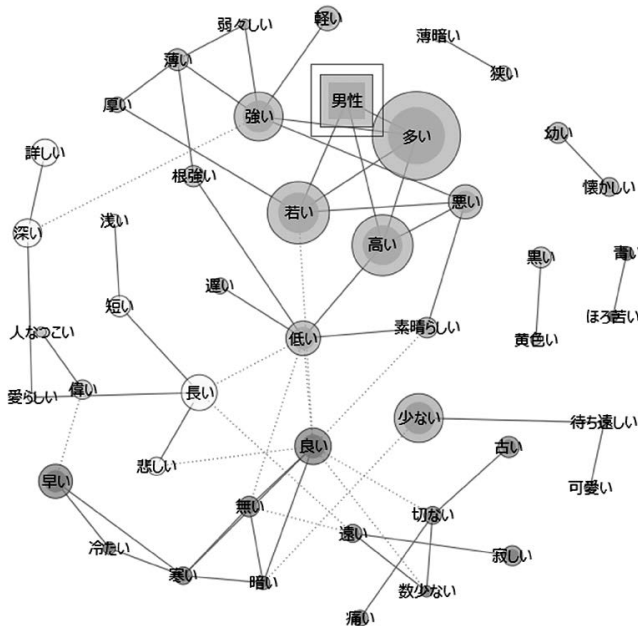


図2 「男性」と関連が強い語の共起ネットワーク

図2は「男性」と形容詞の共起ネットワークである。図2からわかるように、「男性」は「女性」と同じように、「多い」「若い」「高い」という形容詞と強い共起関係を有している。「女性」と「男性」は対称表現としてよく一緒に用いられ、共起ネットワークには重なる語もあるが、それぞれに特徴的な語も少なくない。代表的な例としては「美しい」があげられる。「美しい」は「女性」を含む記事から出力された共起ネットワークにはあらわれるが、「男性」の共起ネットワークにはない。そして、容姿を表す形容詞は「男性」の共起ネットワークにはあらわれなかった。したがって、今回の調査データにおいては、男性より女性を容姿の視点から評価する傾向があると指摘できる。これは「当たり前」のように見えるが、その「当たり前」に見える違いはまさにジェンダー表現の特徴だと言えるだろう。

4.2 「女性」「男性」の直前にある形容詞

図1と図2は「女性」「男性」と形容詞のコロケーションの全体像で、文脈の中で「女性」「男性」がどのような形容詞と共起しているのかはわかったが、「女性」「男性」の直前にどのような形容詞が共起し、それぞれを修飾するかはまだ明らかではない。以下では「女性」「男性」の直前に位置する語に絞り、「女性」「男性」と形容詞のコロケーションを考察する。

まず、KH Coderで「女性」「男性」の直前にある形容詞を指定して取り出した。その結果、「女性」の直前に共起する形容詞は30語（異なり）で共起頻度合計は470回、「男性」の直前に共起する形容詞は21語（異なり）で共起頻度合計は109回であった。表1にその詳細を示す。

表1 「女性」「男性」の直前に共起する形容詞とその頻度①

形容詞+「女性」(470)
若い (377)、美しい (20)、強い (17)、多い (10)、高い (6)、貧しい (4)、素晴らしい (3)、近い (3)、明るい (2)、忙しい (2)、薄い (2)、大きい (2)、親しい (2)、少ない (2)、長い (2)、難しい (2)、新しい、色っぽい、恐ろしい、賢い、可愛い、我慢強い、詳しい、小さい、力強い、激しい、低い、珍しい、優しい、弱い

形容詞+「男性」(109)
若い (79)、高い (4)、痛い (2)、多い (2)、渋い (2)、少ない (2)、近い (2)、古い (2)、古くさい (2)、痛ましい、薄い、大きい、恋しい、親しい、白い、長い、低い、欲しい、優しい、良い、弱々しい

() 内は頻度、頻度無表記のものは1回

ただし、これらの形容詞の中には、例えば、「出産や育児といった出来事の多い女性」、「指導者としての潜在能力の高い女性」、「世代に近い女性」、「同様の冤罪に直面する可能性も高い男性」、「ロシア外務省に近い男性ら」、「古い男性権力と闘っているようにみえる小池知事」などのように、「女性」や「男性」の性質や様子を直接形容するとはいえない例もある。そこで、こうした例を除いて、「女性」「男性」の性質や様子を表す形容詞のみを取り出したものが表2である。

表2 「女性」「男性」の直前に共起する形容詞とその頻度②

形容詞+「女性」(436)
若い (377)、美しい (20)、強い (17)、貧しい (4)、素晴らしい (3)、明るい (2)、忙しい (2)、親しい (2)、新しい、色っぽい、恐ろしい、賢い、可愛い、我慢強い、力強い、激しい、優しい
形容詞+「男性」(89)
若い (79)、渋い (2)、古くさい (2)、痛ましい、恋しい、親しい、優しい、良い、弱々しい

() 内は頻度、頻度無表記のものは1回

表2から四つのことが指摘できる。まず、「男性」より「女性」の直前にある形容詞の方が多いということである。「女性」の出現数は26,011回で「男性」の出現数15,837回の約1.6倍だが、「女性」の直前にある形容詞の共起頻度は436回で「男性」の直前にある形容詞の共起頻度89回の約4.9倍もある。これは、新聞記事においては、女性の方が男性より性質や様子の描写がなされやすい傾向があることを示唆している。二つ目は、「女性」も「男性」も「若い」と最も強い共起関係を有しているが、「女性」の方が「男性」よ

り「若い」と結びつくことが多いということである。「女性」と「若い」の共起頻度は377回であるのに対し、「男性」と「若い」の共起頻度は79回で、「若い」との共起頻度は「女性」が「男性」の約4.8倍にもなる。よって、男性より女性の方が「若さ」の視点から捉えられる傾向があると言える。三つ目は、「女性」は「美しい」という容姿を表す語とよく共起している点である。調査結果では「女性」と「美しい」は20回も共起している。佐竹（2011）は『広辞苑』や『大辞林』クラスの中辞典の収録語には「美女・美人・ぶす」のように美醜の観点から女性を定義した語が多いと指摘している。新聞記事の「女性」と形容詞のコロケーションにも同じ傾向が見られる。四つ目として、「誰をも頼らない強い女性」のように、「女性」と力を表す「強い」もよく一緒に使われていることがあげられる。この裏には、男性が強いことは当然で言語化する必要はないが、女性が強いことは女性のステレオタイプとは異なるためにわざわざそれを言語化して表現しなければならないという暗黙の了解があると考えられる。一方、「男性」には「濃い」「古くさい」との共起があるが、いずれも共起頻度は低い。

4.3 「若い女性」「若い男性」

前節の表2からわかるように、量的な違いがあるものの、形容詞とのコロケーションのうち「女性」と「男性」のいずれも「若い」と強い共起関係を有している。「若い」と「女性」「男性」の共起関係は決して偶然とは言えない。「若い女性」「若い男性」は単に修飾・被修飾の関係にあるのではなく、「若い女性向け」「若い女性を中心に」「若い女性層」「若い男性層」のように、二つの定着度の高いカテゴリーとして特徴的に用いられている。人間が日常生活において知覚し経験する様々な事物をグループにまとめる認識上のプロセスをカテゴリー化という（河上1996：27）。「若い女性」「若い男性」はそれぞれ「女性」「男性」の下位レベルとして、「年齢」を基準に二つのグループにカテゴリー化されている。その実例としては以下のものが挙げられる⁽⁸⁾。

- (1) シニアから若い女性まで、幅広い層に注目されている中村さん。(朝日、2014.02.13)
- (2) これらの自治体では、若い女性が半分に減って人口減少に歯止めがかからず、自治体の機能が維持できなくなるという。(朝日、2014.06.08)
- (3) 客層を若い女性から家族連れに広げ、来園者数が回復した。(朝日、2014.06.14)
- (4) 担当者は「若い女性だけでなく、家族や友達同士で楽しんでもほしい」と話す。(朝日、2014.11.20)
- (5) 「女性や若い男性はたいてい、子育てや趣味、勉強などに時間をもっととりたいと思っている。」(朝日、2015.01.11)
- (6) 最近は年齢層の幅は広がりましたが、20代から40代の女性が3分の2を占めています。逆に若い男性はなかなか買ってくれない。(朝日、2014.11.11)

4.4 「若い女性」「若い男性」のコロケーション

上述したように、「若い女性」「若い男性」はただの修飾・被修飾の関係にあるものではなく、「シニア」「家族」などと同様に一つのカテゴリーとして用いられている。「若い女性」と「若い男性」という二つのカテゴリーはそれぞれ異なったコロケーションを有し、女性・男性を表現している。ここでは「若い女性」「若い男性」と動詞及び名詞のコロケーションについてみる。

4.4.1 「若い女性」「若い男性」と動詞のコロケーション

「若い女性」「若い男性」と動詞のコロケーションの考察にあたっては、「若い女性+が/は/を+動詞(句)」と「若い男性+が/は/を+動詞(句)」を対象とした。表3、表4は共起する動詞をまとめたものである。「若い女性+は+動詞(句)」「若い男性+は+動詞(句)」については、ガ格となるものは「若い女性が」「若い男性が」の項に、ヲ格となるものは「若い女性

を」「若い男性を」の項に入れた。「若い女性」と共起する動詞は112語（異なり）、共起頻度合計は124回、「若い男性」と共起する動詞は34語（異なり）、共起頻度合計は38回であった。

表3 「若い女性」と共起する動詞

若い女性 (124)	若い女性が (103)
	いる (3)、思う (2)、買う (2)、来る (2)、乗る (2)、増える (2)、[被害に] あう、憧れる、集まる、[姿を] 現す、歩き通す、歩く、行く、[加古川に] 浮かぶ、[笑みを] 浮かべる、[結婚を] 受け入れる、[占いを] 受ける、[アクションに] 移す、うつむく、教える、押し込まれる、[命を] 落とす、訪れる、思い描く、思う、織る、回復する、[病気に] かかる、[声を] かけられる、[耳を] 傾ける、語りかける、頑張る、聴く、帰宅する、嫌う、着る、強要される、くぐり抜ける、[ホルモンバランスを] 崩す、告白する、漕ぐ、応える、[愚痴を] こぼす、殺される、号泣する、探す、避ける、[手を] 差し伸べる、仕切る、仕立てる、死亡する、自立する、喋る、[AVに] 出演させられる、[カメラを] 据える、救われる、[気に] する、背負う、説得される、卒業する、携える、訪ねる、立つ、担当する、通過する、[両腕を] 突き上げる、包む、連れる、出会う、出る、[女王と] なる、塗る、飲む、入る、派遣される、[通話を] 始める、[その後を] 引き継ぐ、[仕事を] ペースダウンする、減る、放置される、待つ、[身を] 守る、[笑顔を] 見せる、導かれる、[衣類を] 見る、[目を] 向ける、目指す、持ち帰る、[嗚咽を] もらす、勇気づけられる、[席を] 譲る、要求される、読む、来店する、連行される、分かる
	若い女性を (21)
	描く (3)、[対象に・題材に・奴隷と] する (3)、支える (2)、意識する、搾取する、[供物として] 差し出す、刺す、支援する、人身売買する、射殺する、[母親だと] 直感する、見つける、見る、目撃する、呼び込む、拉致する

□ 内は前要素の例、() 内は頻度、頻度無表記のものは1回

表4 「若い男性」と共起する動詞

若い男性 (38)	若い男性が (35)
	座る (3)、[腕まくり・ゲームを] する (2)、取る (2)、言う、いる、動き回る、運転する、買う、[少女を] 抱える、[洗練やフェミニンさも] 獲得する、語りかける、[棺を] 担ぐ、キュレーター化する、来る、購入する、腰かける、叫ぶ、[頭を] 下げる、[萌え系の女性たちに] 迫られる、倒れる、[肩を] たたく、付き添う、亡くなる、[建物を] 塗り替える、話し込む、引き込まれる、増える、[二の腕を] 見せる、[水面を] 見る、[身を] 寄せてくる、[私に] 寄りかかる
	若い男性を (3)
	刺し殺す、住ませる、見かける

□ 内は前要素の例、() 内は頻度、頻度無表記のものは1回

「若い男性」と動詞のコロケーションでは、以下の①～⑤のように、若い男性が行為の主体としてその動作を行う表現が多い。このタイプの表現は共起する動詞の約9割を占めている。

- ①若い男性が座ったままゲームをしている。
- ②若い男性が橋の欄干に腰かけ、水面を見ていた。
- ③若い男性が腕まくりして二の腕を見せる。
- ④若い男性が忙しそうに建物をペンキで塗り替えていた。
- ⑤若い男性らが赤い布で覆われた棺を担ぐ。

「若い女性」と共起する動詞は、以下の⑥～⑨のように「号泣した」「嗚咽をもらした」「笑みを浮かべながら」「笑顔を見せていた」などの喜怒哀楽を表す表現に用いられている。調査範囲では「若い男性」と共起する動詞にはこうした喜怒哀楽表現での使用は一回もない。日本語には「男泣き」(男が抑えきれずに泣くこと)ということばがあり、対称表現の「女泣き」はないように、女性が泣くのは普通のこととされるのに対し、男性が泣くのはわざわざ名づけられるほど珍しいこととして捉えられる。千田他(2013:7)では女の子が泣いたらすぐに抱き上げ、男の子が泣いたら「男の子だから」と自立心を養わせると述べられている。このように作られたジェンダーの結果

は言語表現にも「若い女性」「若い男性」のコロケーションとして具現化されている。

⑥若い女性は終演時に号泣した。

⑦若い女性が嗚咽をもらした。

⑧若い女性が少し笑みを浮かべながら。

⑨若い女性がくぐり抜け、笑顔を見せていた。

喜怒哀楽表現のほかに、「若い女性を描く」「若い女性を題材にする」「若い女性を支援する」「若い女性を支える」「若い女性を呼び込む」「若い女性を目撃する」などのように、「若い女性」を行為の対象として客体化した表現も多い。そして、「若い女性が AV に出演させられる」「若い女性が連行される」などのように「若い女性」が受け身文の主語となるものも13例ある。しかし、「若い男性」の場合、今回の調査データでは同様の例は非常に少ない。また、以下の⑩～⑭のように、「若い女性」が被害者として「殺す」「拉致する」などの犯罪を表す複数の動詞と共起しているのも特徴的である。これは、新聞記事というデータの性格によるものだが、犯罪の被害者には女性が多いことを反映しているといえるだろう。

⑩若い女性を見つけ、背部を刺した。

⑪若い女性を射殺してしまう。

⑫若い女性を根こそぎ拉致する。

⑬若い女性が殺されている。

⑭若い女性が被害にあってしまった。

4.4.2 「若い女性」「若い男性」と名詞のコロケーション

「若い女性」「若い男性」と名詞のコロケーションについては、「若い女性 + の + 名詞」と「若い男性 + の + 名詞」を調査した。「若い女性 + の」と共起する名詞は47語（異なり）、共起頻度合計は64回、「若い男性 + の」と共起する名詞は8語（異なり）、共起頻度合計は9回であった。それぞれと共起する名詞を表5に示す。

表5 「若い女性」「若い男性」と共起する名詞

若い女性 (64)
間 (5)、姿 (4)、関心 (3)、心 (3)、卵子 (3)、遺体 (2)、多く (2)、日常 (2)、場合 (2)、生きづらさ、意識調査、一生、運動不足、過労死、感覚派、感染率、気象予報士、客層、キャリアー、共感、グループ、ケアマネジャー、声、コメント、写真、就職先、承認要求、成長、相談、担当者、力、手頃、店員さん、隣、戸惑い・怒り・悲しみ、取り込み、同僚、独白、ネームプレート、悲劇、変死体、マナー、眉、味方、皆さん、理想像、流行
若い男性 (9)
遺体 (2)、意識、絞殺死体、職員、2人組、非正規労働者、理学療法士、恋愛

() 内は頻度、頻度無表記のものは1回

「若い男性」は出現回数が79と「若い女性」377に比べて少ないため、結びつく名詞のバリエーションも少ない。一方、「若い女性」の場合は、表5からわかるように、「生きづらさ、一生、成長、悲劇」のような人生に関する語や「関心、共感、心、承認要求、理想像」のような心的態度に関する語と共起している。また、「流行、過労死、就職先」などの社会に関する語とも共起している。このように、「若い女性」と共起している名詞は非常にバリエーションに富んでおり、若い女性の一つのカテゴリーとして様々な角度から注目され、報道されていることがわかる。そして、「年齢」を基準に若い女性とそうでない女性を区別し、女性を「年齢」から捉え、強調する傾向がうかがわれる。また、この傾向は社会に女性の「若さ」の重要性を伝えるものであるといえる。

5. まとめ

本研究では『朝日新聞』を調査資料に「女性」「男性」と形容詞のコロケーションの視点から日本語のジェンダー表現を考察した。

まず、共起語ネットワークの全体像から量的な分析を行った結果、「女性」「男性」と形容詞のコロケーションは重なる部分もあるが、異なる共起語もあることがわかった。「女性」も「男性」も「多い」「若い」「高い」と

強い共起関係を有している。一方、「美しい」のような容姿を表す形容詞は「女性」と関連が強い語の共起ネットワーク図にはあらわれたが、「男性」と関連が強い語の共起ネットワーク図には容姿を表す形容詞は見られなかった。「女性」「男性」の共起語の違いは「当たり前」のようにみえ、「女性」「男性」は対称的な語として用いられるが、その共起語の違いはまさにジェンダー表現の特徴だと言える。

次に、「女性」「男性」の直前に位置する形容詞を調査し、量的・質的両面からの分析を行った。その結果から、「男性」より「女性」の直前にある形容詞の方が多いこと、「女性」も「男性」も「若い」と最も強い共起関係を有しているが、「女性」の方が「男性」より「若い」と多く結びついていること、「女性」は力を表す「強い」や容姿を表す「美しい」とよく共起していることが明らかになった。また、「若い」と「女性」「男性」の結びつきに注目して、テキスト本文に戻り、確認しながら分析した結果、「若い」と「女性」「男性」とが強い共起関係を有することは偶然ではなく、「若い女性」「若い男性」は定着度の高い二つのカテゴリーとして用いられていることがわかった。そして、この二つのカテゴリーはまたそれぞれ異なったコロケーションを有していることが確認された。「若い女性」は「号泣する」「描く」「支える」「一生」「心」「流行」などのバリエーションに富む動詞、名詞と共起する一方で、「若い男性」のもともとの基数にも関係するが、「若い男性」と動詞、名詞のコロケーションは比較的乏しいといえる。若い女性の一つのカテゴリーとして様々な角度から注目されて報道されているのである。また、女性は「年齢」を基準に若い女性とそうでない女性とに分類され、女性は男性より若さの視点から捉えられる傾向があることがうかがえる。

注

- (1) 混乱を避けるために、本研究では女性、男性その人と区別する意味で、研究対象となる名詞「女性」と「男性」には「」を付して表記している。
- (2) 日本語訳は石川（2006：3）を参照した。
- (3) KH Coder は、樋口耕一によって開発されたテキスト型データを統計的に分析す

るための無料ソフトである。詳しくは樋口（2014）を参照されたい。

- (4) 「記事全体」を単位に抽出すると、「女性」「男性」と強いコロケーションを有する語を見出しにくくなる恐れがあるので、今回は「段落」を単位にし、「女性」「男性」を含む記事を抽出した。
- (5) 樋口（2014：147）によると、このコマンドを用いれば、特定の語と強く関連しているのはどんな語か、あるいは、特定のコードと強く関連しているのはどんな語かを容易に探索できる。
- (6) 樋口（2014：143）によると、「KWIC コンコーダンス」は分析対象ファイル内で抽出語がどのように用いられていたのかという文脈を探ることができる。
- (7) 樋口（2014：158）によると、近くに布置されているだけで線で結ばれていなければ、強い共起関係はない。
- (8) 例文中の考察対象の表現には実線の下線を施す。また、考察対象以外の何らかの注目すべき表現には点線の下線を付す。

参考文献

- 石川慎一郎（2006）「言語コーパスからのコロケーション検出の手法—基礎的統計値について—」『統計数理研究所共同研究レポート』190 pp. 1-14 統計数理研究所
- 遠藤織枝（1997）「女性を表す語句と表現—新聞の人物紹介と雑誌広告の欄から—」井出祥子編『女性語の世界』pp. 94-113 明治書院
- 河上誓作（1996）『認知言語学の基礎』研究社出版
- 川端亮（2003）「宗教の計量的分析—真如苑を事例として」<http://hdl.handle.net/11094/1397>
大阪大学人間科学研究科平成14年度博士論文
- 国立国語研究所（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- ことばと女を考える会（1985）『国語辞典にみる女性差別』三一書房
- 佐竹久仁子（2011）「フェミニズムと語彙」斎藤倫明・石井正彦編『これからの語彙論』pp. 189-200 ひつじ書房
- 寿岳章子（1979）『日本語と女』岩波書店
- 千田有紀・中西祐子・青山薫（2013）『ジェンダー論をつかむ』有斐閣

- 田中和子（1984）「新聞にみる構造化された性差別表現」磯村英一・福岡安則編『マスコミと差別語問題』 pp. 179-201 明石書店
- 田野村忠温（2009）「コーパスからのコロケーション情報抽出：分析手法の検討とコロケーション辞典項目の試作」『阪大日本語研究』 21 pp. 21-41 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 中村桃子（1995）『ことばとフェミニズム』 勁草書房
- 中村桃子（2007）『＜性＞と日本語—ことばがつくる女と男』 日本放送出版協会
- 樋口耕一（2014）『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を指して』 ナカニシヤ出版
- 堀正広（2009）『英語コロケーション研究入門』 研究社
- Sinclair, J., Jones, S., & Daley, R. (2004) *English Collocation Studies: The OSTI Report*. London · New York: Continuum.

（ま う え ん う え ん：筑波大学大学院）

（2018.11.11 受理）